名古屋市立大学
大学院医学研究科・医学部 広報誌

瑞医

世界に羽ばたくMEDIPORT

2018.5. VOL.36

contents

極 研究&教育 Current topics in research and education
人 時の人 People in the news
技 最新医療の紹介 Latest developments on the medical front
和 お知らせ Information

地域医療教育研究センターが開設されました

名古屋市立大学病院は、関連病院と初期研修や専門医研修、診療の面で連携しながら相互の医療水準の向上、医師の育成等を進めております。関連病院とのさらなる連携を進めるため、本年4月1日より名古屋市立大学病院に「地域医療教育研究センター」を開設いたしました。関連病院にもセンター分室を設置し、センターに所属する教員が本学およびその病院において、横断的に診療・教育・研究活動を行うことで、相互の連携を強化していきます。

まずは、関連病院のひとつである蒲郡市民病院に分室を設置し、1名の教授、2名の講師がセンターに着任しました。蒲郡市民病院は、蒲郡市唯一の急性期病院として東三河南部医療圏を支えてきた地域の重要な病院であり、地域包括ケア病棟や開業医と連携した開放病床を有しており、地域包括ケアシステムの構築においても重要な役割を果たしております。

本センターにより、高齢化率の高い蒲郡市において地域包括医療に携わることで、蒲郡市及び東三河南部医療圏における地域医療の状況や疾病構造、患者ニーズについて分析し、地域の医療水準の向上に資するとともに、団塊の世代が後期高齢者になる2025年にむけて、国が進める地域包括ケアシステム実現のために必要な医療の機能分化・連携について、研究および医師の教育を実施していきます。

末筆となりますが、地域医療教育研究センターの開設にあたり、ご理解を賜りました蒲郡市をはじめとする関係の皆様に心より御礼申し上げるとともに、引き続きご支援を賜りますようお願い申し上げます。

医学研究科長　道川 誠

“瑞医の由来”

『瑞医（ずいい）』という言葉は、瑞穂で育った医師が心の支えとなる名市大、「瑞」にはめでたいことという意味があるので新しい門出の広報誌にと考えました。新しく発足した同窓会と一体となって歩むことを目的に、その名前「瑞友会」と相呼応しています。サブタイトルの「MEDIPORT」は、「Medical」と「Port（港・空港）」をかけた造語。名市大を最新情報を発信する拠点とし、卒業生が社会・世界へ出航し、またいつでも戻ってこられる港であるようにとの願いをこめています。

01 研究&教育
Current topics in research and education

研　究

第2回NCU-HU（ハルリム大学）国際合同学術シンポジウムへの参加報告

シンポジウム終了後懇親会にて本学とハルリム大関係者での記念撮影
後列左から、Suh教授、奥津、杉浦、酒々井、下平、道川、Kim上級副学長、Hon医学部長、細川、Ju産学連携部長、Choi副学長、前列左から、Kwak教授、間瀬、築地、Song教授、天野、Choi教授

11年前に始まった名古屋市立大学（NCU）医学研究科と韓国ハルリム大学（HU）医学部との学術交流は、幾多の困難をのりこえ2014年に交換留学制度が始まりました。2016年7月にはHUのKim Choong Soo学長、Kim Yong Sun副学長、Lee病院長らが本学を訪れコンタクトポイント設置調印と第1回合同学術シンポジウムに発展しています。6名が研究成果を発表し活発な討論が行われています。今回はより幅広い交流のため、国際交流センターが主導して医学研究科以外の研究科にも参加を呼びかけ、2017年11月に道川誠医学研究科長をはじめ医・薬・看護・システム自然の教員計9名がHUを訪れ第2回NCU-HU国際合同学術シンポジウムに参加しています。Lee病院長の開催挨拶から始まり、本学とHUから計19演題の口頭発表となりました。杉浦講師（心臓・腎高血圧内科学）、下平講師（放射線医学）、間瀬病院助教（産科婦人科学）、築地講師（薬学研究科）、奥津講師（システム自然科学研究科）、天野助教（看護学研究科）、細川助教（看護学研究科）が研究成果を発表しています。本シンポジウムはHU第10回基礎・臨床領域の橋渡し研究発表会の一部であり計79演題のポスター発表も同時に行われています。現在、第3回NCU-HU国際合同学術シンポジウムにむけて準備をすすめています。これまでの経緯から、NCU-HU学術交流は、本学が掲げる未来プランのうち「国際化」の先がけのひとつといえます。関係者の皆様にはご協力を何卒よろしくお願いいたします。

分子毒性学分野 教授、国際化担当副研究科長　酒々井 眞澄

教　育

文部科学省　大学改革推進事業「課題解決型高度医療人材育成プログラム」～慢性の痛みに関する領域～　三大学合同シンポジウム

わが国では、成人の4.4人に1人が慢性的な痛みを持っておりますが、治療が難しく、患者の満足度が低いため通院を中断し、痛みを抱えながら生活している人が多いのが現状です。「名古屋市立大学」及び「三重大学・鈴鹿医療科学大学」はこうした慢性疼痛に対応できる人材を幅広く育成することを目的に事業を開始し、平成28年度には文部科学省の「課題解決型高度医療人材養成プログラム」にそれぞれ採択されました。

採択から二年度を経たこの度、より一層の事業発展を目指し、各大学の取り組みを共有する機会として平成30年3月17日（土）に三大学合同シンポジウムを名古屋市立大学医学研究棟11階会議室にて開催しました。

三重大学・鈴鹿医療科学大学より「慢性疼痛の病理生理、診断と治療、チーム医療的アプローチを学ぶ講義形式のコアコース」「地域での慢性疼痛チーム医療をシュミレーションする体験重視のワークショップ形式集中授業」の講演を、本学より「統合的慢性疼痛管理手法の体系化を目指したいたみセンターの開設」「慢性痛に対する新世代認知行動療法」の講演を行いました。また特別講演として他大学採択事業のメンバーでもある滋賀医科大学医学部附属病院ペインクリニック科の福井聖教授より「慢性疼痛と社会、脳科学と行動変容、教育の必要性」についてご講演頂きました。

当日は学生含む37名にご参集いただき、人材育成事業を広く多くの方に知ってもらえるとても貴重な機会となりました。

精神・認知・行動医学分野 教授　明智 龍男

研　　究

頭脳循環プログラムに係るシンポジウムの開催報告

2018年3月16日、医学研究科研究棟講義室Aにおいて、国際シンポジウム「NCU Global Young Investigator Forum 2018」が盛大に開催されました。本シンポジウムは、2015年より医学研究科・薬学研究科・システム自然科学研究科に所属する研究者を中心に推進して参りました日本学術振興会「頭脳循環を加速する戦略的ネットワーク推進プログラム（エピゲノム情報制御機構の解明と臨床応用）」の最終イベントとして実施されたものです。本事業のサポートを受けて海外で研究を行った若手研究者7名と海外からの5名の招待講演者による口頭発表に加えて、5名のゲストを含む21名のポスター発表が行われました。ご協力下さいました皆様に御礼申し上げます。

本プログラムでは、コペンハーゲン大学、カロリンスカ研究所、キュリー研究所、バレンシア大学、シンガポールゲノム研究所、ペンシルバニア大学と様々な共同研究が行われ、その成果は学術雑誌や学会などで発表され、高く評価されています。バレンシア大学とは大学間交流協定を締結しました。こうした共同研究体制を基盤として、今後の本学の国際化が促進されることが期待されます。また、研究者間の交流促進のため、招へいセミナー、若手イブニングセミナー、リトリートなどの活動を行っております。上述の日本学術振興会の事業は終了しましたが、これら学内のイベントは、対象を広げて継続する予定です。ライフサイエンスに関わる全ての研究者を対象にしておりますので、お気軽に参加して下さい。運営に協力して下さる方も募集していますので、ご興味のある方はご連絡下さい。

再生医学分野 教授　澤本 和延

研究室紹介

加齢・環境皮膚科学

名古屋市立大学病院皮膚科では、幅広い診療カバーするようにし、当院で外来患者数のもっとも多い診療科です（1日170人平均）。乾癬や掌蹠膿疱症をはじめ白斑、円形脱毛症などの難治性疾患から、アトピー性皮膚炎などのアレルギー疾患、皮膚T細胞リンパ腫のような稀少疾患、手術を必要とする皮膚悪性腫瘍まで、県内外から多くの患者さん(一部中国)が来院されます。救急で来院する重症皮膚感染、難治性潰瘍、また、抗がん剤による皮膚障害、薬疹、他科との連携をすすめ、皮疹からの疾患のアプローチや膠原病・リウマチ性疾患にも対応しています。

こういった豊富な臨床経験から様々な疑問に、研究という方法を用いて、より高い位置から眺め、臨床を考えることを目的として研究に取り組んでいます。乾癬、皮膚T細胞性リンパ腫においては、私たちが得意とする光線治療に関連した臨床研究、また白斑においては培養表皮移植の有効性の検討を行う臨床試験を現在行っています。また、難治性疾患、稀少疾患でも十分な症例数があることから、国内治験および国際共同治験を非常に多く行っています。AMED医工連携事業化推進事業、AMED次世代がんなどにも採択され、医療機器開発、がん研究にも力を入れています。

さらにこの数年の間には、県下有数の中核・研修病院である海南病院、春日井市民病院、江南厚生病院、岡崎市民病院といった病院が当科の関連施設となり、うち3病院は常勤化することとなりました。このように地域をカバーすることで、「地域でトップクラスの医療を提供すること、すなわち皮膚科のことなら何でも協力できるような幅広い診療体制」の充実をはかっていきたいと考えております。

この中に、十分なやりがいや充実感を見出し、仕事上の責任を果たすとともに、人生の各段階に応じて多様な生き方が選択・実現できる仕事と生活の調和（WLB）を目指していき、実際、復帰率100%を達成しております。これらのすべての結果、開講以来、最大数の勤務医数（医局員数）になりました。今後とも、ご支援をよろしくお願いいたします。

加齢・環境皮膚学分野 講師　西田 絵美

02 時の人 People in the news

新任教授紹介

細胞生化学分野― 加藤 洋一 教授

加藤 洋一 教授

この度、2018年1月1日付で、細胞生化学分野の教授を拝命致しました。ここに謹んでご挨拶申し上げます。

私は1992年に名古屋市立大学医学部を卒業し、1997年に同大学大学院第二生化学講座で学位を取得した後、米国ボストン小児病院でポストドクトラルフェローとして発生生物学とシグナル伝達経路の研究に励みました。2003年より米国フロリダ州立大学医学部で研究室を主宰し、研究と教育に14年間携わって参りました。

私の研究課題は「繊毛の形成機序とそれに起因する病態機序の解明」です。繊毛はヒトのほぼ全ての細胞表面に存在するアンテナ状の細胞小器官で、外部からの刺激の受信や体内の水流（脳脊髄液など）を形成することによって生体内で重要な役割を果たしています。繊毛の異常は、腎嚢胞、精神遅滞、網膜色素変性症、嗅覚障害、骨格異常、呼吸器系慢性感染症、不妊、先天性心疾患を伴う内臓逆位など多岐にわたる疾患を引き起こします。また、繊毛は腫瘍、肥満、糖尿病などとの関連も議論されており、繊毛形成に関わる因子はそれらの疾患の診断マーカーや治療標的として大いに注目されています。

教育面では、医学教育の基礎の一つとなる生化学を担当致します。学生が将来医師となり疾患と向き合った時に、病態を正しく理解し適切な治療法を導き出せる能力を身につけるための土台となるような講義を目指し創意工夫していきたいと考えています。

現在、日本の医学教育、研究を取り巻く環境は変換期を迎えていますが、名古屋市立大学がその荒波を乗り越え、より発展していくために、微力ながら尽力する所存です。今後とも、皆様方のご指導ご鞭撻を賜りますよう、お願い申し上げます。

名誉教授のご紹介

細胞分子生物学分野― 岡本 尚 名誉教授

岡本 尚 名誉教授

岡本教授は1977年に慶應義塾大学医学部を卒業されました。大学生時代は物理学の岡小天先生、生理学の御子柴克彦先生と金子章道先生、および微生物学の高野利也先生の教室に出入りされ、卒業後は本間光夫教授の主宰される内科学血液・感染症・リウマチ学教室の大学院に進まれました。1983年の8月から約3年間、米国の国立癌研究所に留学し、Robert Gallo博士の研究部でFlossie Wong-Staal博士の元でHIVとHTLV-1の転写制御機構や病原性の分子生物学的研究に従事されました。帰国後、国立がんセンター研究所ウイルス部室長を経て、1993年7月から新設されたばかりの名市大医学部分子医学研究所分子遺伝部門（後に細胞分子生物学分野と名称変更）の教授に着任され、以後25年にわたり研究と教育に貢献されました。この間に、京都大学ウイルス研究所の客員助教授および客員教授、藤田保健衛生大学医学部の内科学客員教授、フィリピンのサントトーマス大学の理学部客員教授そして名誉教授、さらにフィリピン大学の客員教授などを歴任されました。また、2002年には日本エイズ学会の会長として名古屋市内で学会総会を開催、2006年以降5年間にわたり、日独エイズシンポジウムの日本側オーガナイザーとして毎年シンポジウムを開催されました。2006年からは日本学術会議の基礎医学部会の病原体分科会に属し、幹事および委員長を歴任され今日に至ります。

先生の研究領域は、エイズ、がん、自己免疫疾患、統合失調症、と多岐にわたります。これらの疾患を「転写」という観点から根本的治療を目指すという信念をもとに、現在も研究を続けられています。更なるご活躍とご健康を祈念致します。

細胞分子生物学分野 講師　朝光 かおり

02 時の人 People in the news

名誉教授のご紹介

消化器・代謝内科学分野― 城 卓志 名誉教授

城 卓志 名誉教授

城卓志先生は、1978年に名古屋市立大学医学部を卒業された後、旧第一内科、関連病院にて臨床の研鑽を積まれました。その後、旧第一内科に研究医として所属され、消化器病学、主に消化管についての基礎研究も開始されました。1988年より2年間、米国ルイジアナ州立大学・生理学教室に、1997年にはオーストラリア、ウェールズ大学に留学され、消化管微小循環、粘膜障害、Helicobacter pyloriについて研究され、多数の論文を発表するとともに日本消化器病学会奨励賞の受賞などの業績を残されました。

2006年に旧臨床機能内科学教授に就任され、その後の名称変更に伴い、消化器・代謝内科学教授となられました。教授として、消化管、胆膵、肝臓、内分泌糖尿病の4つのグループを統括、指導され、教室は臨床、研究の両分野にて発展し、多数の競争的資金が獲得できるようになりました。そして、城先生の御指導により、教室から多くの学位取得者及び指導者が輩出されております。また長年、日本消化管学会の理事として活躍され、2017年には、第13回消化管学会学術集会の学会会長を務められました。学生教育にも情熱を注がれ、学生が卒業後、直ちに臨床の現場で活躍できることを目標に、指導にあたられるだけでなく、教育システムやプログラムの整備を行ってきました。大学におかれましては、2012年から5年間、名古屋市立大学理事及び名古屋市立大学病院長を兼任され、病院経営や職場環境の改善に努められました。また「医療デザイン研究センター」を院内に設立し産学官連携を推進するなど、斬新なアイデアで大学及び病院の発展に貢献されております。

教授退任後は蒲郡市民病院最高経営責任者として地域医療に携ると共に、特命学長補佐（関連病院アライアンス再編担当）として、大学と関連病院の連携についても取り組まれる予定です。今後のご健康と更なるご活躍を祈念致します。

消化器・代謝内科学分野 講師　内藤 格

整形外科学分野― 大塚 隆信 名誉教授

大塚 隆信 名誉教授

大塚隆信先生は昭和53年に名古屋市立大学医学部をご卒業になられました。医学生時代は野球部に所属され文武両道でした。昭和61年に本学整形外科助手、平成4年同講師、平成13年同助教授を経て、平成14年9月に名古屋市立大学大学院医学研究科整形外科教授に就任されました。また、就任前の平成10年から2年間Calgary UniversityとChicago Universityに留学されて多くの研鑽を積まれました。

教授就任前から世界で初めて悪性軟部腫瘍に対する放射線療法＋温熱療法＋化学療法を融合させた画期的なRHC療法を提唱されて数多くの基礎研究および臨床研究をてがけてこられました。教授就任後は、『和』の精神で円滑な医局および関連病院運営をされるとともに、我々医局員に対して国内外に留学して勉強する機会を与えてくださいました。その結果、30名以上がアメリカ、ヨーロッパなど世界各地に留学させていただきました。また、大学院生の指導にも情熱を注がれて56名（含論文博士14名）の学位指導をなさってくださいました。大塚先生は海外の医療支援にも非常に積極的でした。特にモンゴル共和国には何度も足を運ばれて、現地の医師への指導はもちろん様々な医療機器を寄付されて多大な医療貢献をなさいました。その成果を認められて、モンゴル共和国から北極星勲章を授与されました。また在任中には日本整形外科基礎学術集会をはじめ全国レベルの学会長を多くなされておられます。

平成30年4月からは東海学園大学教育学部教育学科教授として若人の教育に携わられるとともに豊川市民病院特命管理監として名市大関連病院のためにご尽力頂いております。

今後も益々のご活躍とご健康を祈念いたします。

整形外科学分野 病院講師　岡本 秀貴

Technology and initiative 技

03 最新医療の紹介
Latest developments on the medical front

新生児の低体温療法…正しい冷却法の普及に貢献、現在は適応拡大のための全国研究を主導。

低体温療法の導入

導入24時間後

あかちゃんは各種集中治療・モニタリング機器に囲まれてはいますが、新生児ではシバリングの影響がないため、ほとんど鎮静は行いません。このため、面会にいらっしゃるお母さんは、あかちゃんのかわいらしい表情や吸啜などの動きを見ることができます。

心停止や頭部外傷による脳組織傷害は、その致命率が高いのに加え、生存者も高率に合併症を遺す深刻な病態です。古くから時代を代表する頭脳が脳保護療法の開発に挑み続け、500種類以上の治療薬が実験系から提案されましたが、どれ一つとして大規模臨床試験で有効性が認められることはありませんでした。今世紀に入ってようやく、32-34℃の低体温療法が成人の蘇生後脳症の予後を改善するデータが報告されるようになりましたが、冷却による強い震戦・呼吸循環抑制・易感染性を克服できず、現在は36℃の体温を正確に維持する管理に後退しています。これに対して新生児脳症においては、生後6時間以内に33.5℃・72時間の低体温療法を開始することで、後遺症なく生存するチャンスが大幅に増大することが確認され、国際的ガイドラインでも推奨されるようになりました。

私は留学先の英国および前任地九州において、低体温療法の基礎・臨床をつなぐ研究に従事してきました。2010年以降は厚生労働省の研究班員として、日本における新生児の低体温療法ガイドライン作成・教育啓発活動・Baby Cooling Japanと呼ばれる全国症例登録制度の立ち上げを担当し、現在は私と同時に名市大に着任してくれた津田医師とともに、適応症例拡大のための第I相多施設共同研究を主導しています。当院でも2010年以降、低体温療法適応児の受け入れを開始していますが、今後は臨床研究の本部を本学に移し、来年以降の第II-III相多施設共同研究を主導すべく準備を進めているところです。名市大NICUは日本の新生児医療発祥の地です。台頭する名大勢に押され、皆様にご心配をおかけした時期もあったようですが、最近は高水準と温かさを両立させる医療を実践し、低体温療法施行児や在胎22-27週の超早産児への高度医療において非常に良い成績を上げています。周辺施設への認知度Upのために、皆様もどうかご協力いただけますようお願いいたします。

新生児・小児医学分野 准教授 分べん成育先端医療センター　岩田 欧介

喜谷記念内視鏡医療センターの拡充

2018年4月より名古屋市立大学病院の内視鏡センターが拡充され、新たに「喜谷記念内視鏡医療センター」としてオープン致しました。

当センターの拡充、整備に当たっては、大腸がんの代表的な治療薬であるオキサリプラチンの開発者の名古屋市立大学薬学部名誉教授　故・喜谷喜徳先生が設立された喜谷記念トラストより多大なご支援をいただきました。喜谷先生はじめ関係者の方々への感謝の意をこめて「喜谷記念内視鏡医療センター」と命名されました。

喜谷記念内視鏡医療センターでは、プライバシーの確保のため全検査室が個室化されました。リカバリールームも新設され、外来でのセデーション（鎮静）下での苦痛のない内視鏡検査を受けていただくことができるようになりました。センター内にX線透視室、内視鏡スコープ洗浄室が設置され、効率の良い内視鏡医療が可能となりました。

すでに近隣の医療機関からは、外来への紹介を介さず、上部消化管内視鏡検査を直接オーダーしていただくシステムも稼動しています。

当センターでは以下のような最先端の内視鏡診療が行われています。

呼吸器：気管支scopeから65℃に加温することにより気道の過敏性を抑制する、重症喘息に対する気管支サーモプラスティ治療。
胆　膵：ERCP下に挿入する極細径（3.5mm）の胆道・膵管鏡:SpyGlassによる内視鏡診断、SpyGlass観察下の電気水圧衝撃波破砕による結石破砕・除去治療、超音波内視鏡による膵嚢胞ドレナージ術、超音波内視鏡下胆管胃・十二指腸吻合術。
消化管：小腸・大腸のカプセル内視鏡検査、再発食道癌に対する第2世代光線力学療法（photodynamic therapy: PDT）。

最新の内視鏡医療を安全に、そして安心して受けていただけるよう、職員一同力を合わせてがんばっております。皆様からのご指導、ご鞭撻、これからもよろしくお願い申し上げます。

内視鏡医療センター長　片岡 洋望 、副センター長　宮部 勝之

04 お知らせ Information

学生生活

Beyond the Resident Project（BRJ）

本年3月にドクターエイドと合同で行った懇親会

Beyond the Resident Project (BRJ)は医師として必要となる基本的な臨床スキルを学生のうちに身に着つけ「研修医を超える」ことを目標とした活動です。有志の先生方のご協力のもと、胸部単純エックス線写真や心電図の読影、超音波検査、一般診察スキルなどを学んでいます。胸部写真と心電図は200症例以上を経験することで、正常から異常まで対応できるように学習します。心エコーと腹部エコーは学生どうしで練習し合い感覚をつかみます。また昨年は蒲郡市民病院で当直実習の機会を頂き、身につけた技術を実際の現場で活かすことを学びました。現在は5年生24名と2年生5名が活動中で、研修医となった先輩は学生の指導にも参加してくれています。

大学のカリキュラムではこのような実践的な手技を現場で生かすことまでを目標に学ぶ機会は少ないです。また自己の学習では国家試験対策のような知識の詰め込みになりがちです。BRJでの学習は、研修医になってから大きな力となると感じています。

医学部6年生　小峠 和希

救命救急センター　ドクターエイドのご紹介

救命救急センターでは、年間6000台を超える救急搬送患者に対応するため、2016年より学生アルバイト「ドクターエイド」を導入しています。昼夜を問わず、様々な患者さんが搬送されてくる救命救急センターにおいて、医師・看護師のアシスタントをしながら、そこで学んだこと、感じたことを今後の研究や仕事に生かしてもらおう、という狙いがあります。

当初、対象を医学部、看護学部の学生に限定していましたが、現在は全学部の全学年を対象に募集を行っています。その結果、2018年4月現在、医学部、看護学部、人文社会学部、医学研究科、さらには名古屋大学の学生まで合計31名が在籍して、それぞれの学業や生活に応じた働き方をしています。学年も2年生から5年生まで幅広く、今年度の1年生からの問い合わせもすでに届いています。

ドクターエイドとして働く彼らの真剣で純粋な眼差しは、医師や看護師にアシスタントの役割以上の活気を与えてくれています。

地域の救急医療を担う人材を育てる大学病院として、学生とともに名市大の救命救急センターは発展します。

先進急性期医療学分野 教授　松嶋 麻子

卒業式&入学式が行われました

新入生歓迎会の様子

学位記授与式会場にて

平成30年3月26日に名古屋国際会議場センチュリーホールにて卒業式・学位記授与式が行われ、93名の卒業生が医師としての第一歩を踏み出しました。満開の桜の中、会場にはスーツ姿の男子学生や着物・袴姿の女子学生があふれ華やかな式でした。6年間共に勉強してきた同級生との別れを惜しみながらも、新しい生活への期待に満ち溢れている表情がとても印象的でした。

そして4月5日には同じく名古屋国際会議場にて入学式が行われ、97名の新入生を迎えました。前日には医学部の新入生歓迎会も行われ、教職員や先輩学生が多数集まり、和やかな雰囲気のなか新入生との交流を深めていました。

地域包括ケア推進・研究センター設置

2018年4月、大学病院組織として地域包括ケア推進・研究センターが設置されました。これまで医療の中心は病院でしたが、今後の超高齢社会において、高齢者の療養は、生活、住まい、居宅介護・医療サービスにシフトします。地域包括ケアはそれらを中学校区規模の地域で完結させようとする施策で、大学病院とはあまり関係がないように思われる領域です。

しかし、今後の100年は明治維新以来続いてきた人口増加を基本とした経済活動では全く通用しなくなり人口減少を基本としたこれまでにない価値観が創生されるかもしれません。地域包括ケアですら、上手く機能していくのかは未知数です。大学病院であっても、今後、大きな発想転換が求められる可能性があります。

本センターは、現時点では名古屋市健康福祉局の委託事業の運用を中心に展開していき、病院運営に貢献できる可能性は低いかもしれません。しかし、大学が地域包括ケアの推進・研究に取り組むことは先進的であり、長期的に見て大学病院と地域との共存、未病の方々の繋がりを重視し、新しい発想で本センターが大学病院運営に貢献していけるようにしたいと考えています。

地域医療教育学分野 教授 地域包括ケア推進・研究センター　赤津 裕康

エコチル調査公開講座

2018年2月24日(土)、全国の小児環境保健専門家7名を講師に迎え、名古屋駅JRゲートタワーにて「エコチル調査公開講座」を開催し、約120名の市民・エコチル参加者等が来場くださいました。妊娠中のつわりは胎児発育には影響しないこと、出産後の再喫煙にはパートナーの喫煙が影響していることなどの研究知見の紹介があり、来場者から活発な質疑応答が行われました。

なお、エコチル調査とは子どもの健康と環境化学物質との関係を調べる全国規模の調査です(全国の親子10万組が協力)。環境省からの委託事業として、東海地域では本学が拠点となり、2011年から調査を進めています。

環境労働衛生学分野 講師　榎原 毅

平成30年度　医療・保健　学びなおし講座 秋期

本学では、医療従事者の復職支援や医療の進歩に対応した能力の向上を図ることを目的として、実践的かつ総合的なプログラムを火・水・木の3講座ご用意。開講テーマは「急性期・災害医療スキルアップ」「発達障害を学ぶ(2018)」「Birth Tour ー安全なお産をめぐる冒険ー」についてを予定。

開催日時　平成30年9月4日(火)～平成30年12月13日(木)
18:30～20:00　毎週火・水・木　(各講座全15回)

募集対象　医療と保健分野の国家資格保有者、一般で興味のある方も対象

定　員　各講座60名

受講料　1講座14,800円(託児サービスあり、1回2,000円)

応募方法
eメールまたは郵送
平成30年7月23日(月)～平成30年8月20日(月)締切予定
詳細は7月下旬頃ホームページに掲載
URL:http://www.med.nagoya-cu.ac.jp/

問い合わせ先　名古屋市立大学教育研究課内「名市大 学びなおし講座事務局」
〒467-8601 名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1　TEL:052-853-8077　eメール:manabi@med.nagoya-cu.ac.jp

ひとこと☆メッセージ募集！

本誌では、皆様からの一言メッセージを募集します!ご無沙汰している同級生に、恩師に・・ワイワイ楽しいお便りお待ちしています。ほっと和む「名市大人のつぶやきコーナー」をみなさんと作りたいと思います。

例えばこんな一言を、

研究者紹介に載った同期・先輩へ。「おまえも、がんばってるみたいやん。」
ごぶさたしている同窓生への近況を。「最近、腹が出てきました。」
新米医師のつぶやき、女性医師必見!ウチの家事両立法!「ここが手抜きポイント!」
などなど、必要事項を記入の上、葉書かe-mailで下記までお送りください。(注:次回掲載は9月号です)

1.一言メッセージ(30字以内) 2.卒業年度 3.お名前(ふりがな) *匿名希望またはペンネームでの掲載をご希望の場合はその旨をお書きください。*4.住所　5.電話番号またはE-mailアドレス

《受付》〒467-8602 名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1番地 名古屋市立大学 医学・病院管理部 経営課経営係 広報担当宛　E-Mail:hpkouhou@sec.nagoya-cu.ac.jp

お送りいただいた個人情報については、お便りの採用に関する応募者への問い合わせ、確認以外の目的で使用いたしません

広報誌：瑞 医(ずいい)
発　行：〒467-8602
名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1番地
TEL(052)858-7114 FAX(052)858-7537

URL http://www.nagoya-cu.ac.jp/

※次号の発行は2018年9月下旬発行予定です。[年3回　1月・5月・9月]

我こそは通信員!

広報誌「瑞医」へ最新の話題をお届けしてくださるサポーター大募集!「今、当講座ではこんな若手が頑張っています!」など広報委員会へ取り上げてほしい話題を教えてください。教職員・学生、身分は問いません。我こそは、という方は、E-Mail:hpkouhou@sec.nagoya-cu.ac.jp
医学・病院管理部経営課経営係　広報担当まで